

審査の結果の要旨

論文提出者氏名 佐藤斉華

佐藤氏の論文は、ネパール中部、ヒマラヤ南山麓高地のヨルモとよばれる地域で行われた長期にわたる住み込みフィールドワークにもとづき、この地域の住民が現在、「民族」という新しい概念に影響されながらヨルモという範疇を意識的、反省的にとらえ直し、社会的共同性のあり方を変容させつつある状況を描いた、詳細で情報量の高い民族誌である。ヨルモ地域に止まらず、その住民が多数移り住み一個のコミュニティーを形成している首都カトマンズでも持続的調査を行い、カトマンズ起源のヨルモ民族主義が故地ヨルモにおよぼしている影響を克明に描くことで、本論文の記述と議論はおおいに深みを増している。ネパールの諸民族については日本、欧米などで多数の文化人類学的研究が公刊されている。その中で、これまでまとまった研究のなかったヨルモ住民をめぐる質の高い民族誌を提示した本論文は、ネパール民族誌研究、さらに文化人類学全般に、大きな貢献をなすものである。民族誌的データの量・質について言うなら、本論文は、英語及び日本語で出版された近年のネパール地域の諸民族誌と比較して何ら遜色なく、加えて従来検討されることの少なかったネパール語による資料をも駆使しており、博士論文として要求される水準以上の内容を持つものである。

論文は、ナショナリティ、エスニシティ等をふくむ民族という現象をすぐれて近代的なもの、それ以前の社会的共同性の諸形態との連続性ととも、なんらかの断絶をもふくむものにとらえる立場に立っている。そして、人類に時代と地域を越えて普遍的にあてはまる民族概念の再構成を試みているいくつかの先行理論を批判する。また他方では、民族を近代に固有な歴史的現象と見てそれ以前から存在する共同性の諸形態との相互関係を捨象する人文社会科学上のいくつかの議論をも批判し、民族をふくむがそれに止まらない社会の「共同性」とその変容過程を、全体としてとらえるべきだという重要な理論的主張を説得的に提示し、このことにより、文化人類学はもとより、人文社会科学全般への理論的貢献を果たしている。

論文は、上記の理論的視角に対応する 統一された構成を備えている。第一部は、ネパールの近代

以前から続いてきたヨルモ社会のいくつかの共同性の形を取り上げ、村、親族、尊称であり階層でもあるラマなどについて、フィールドでの豊かなデータにもとづく分析を行っている。村自体がけっして自明な存在ではなく多義的な概念であること、そうしたなかで、村の寺院を支える祭礼共同体としての村というモデルが、もっとも組織的、持続的なものであること、親族名称を拡張的にもちいて行われる人々のあいだでの呼びかけ行為が、言語の遂行的側面において人々の共同性を築いていること、汎チベットの概念としてのラマが、やはり多義的な指示機能を持ちながら、人々をつなぐと同時に分離し、共同性の中に不均衡性をもたらしていることなどが、3つの章にわたって描き出される。第二部では、近代に特有の民族的な共同性がヨルモ社会に導き入れられる様が、ネパール国家とネパール人自身による民族をめぐる諸議論、カトマンズにおける、いくつかの傾向に分裂したヨルモ民族構成運動、ヨルモの人々がさまざまな「民族的」メディアを通じて文章に描くヨルモとしての自己像の分析によって明らかにされる。これに続いては、こうした事象が、第一部で論じられたいくつかの共同性と、どのように微妙に接合しているかが、村の分裂という事件のエピソードを通じて論じられ、全体としてヨルモにおける共同性の近代的状況が明快に明らかにされている。第1部と第2部とは別々のものとして提示されているのではない。土地、村、祭礼、親族イディオム、ラマという名乗りや尊称などが、民族である「われわれヨルモ」と言う観念や運動にどう利用され、またそれらをどう規定しているか、さらに民族言説と運動が民族以前的な共同性にどのような影響をおよぼしているかが、各章を有機的に結びつけて論じられている。

論文では、「共同性」と「近代」という二つの鍵概念が十分には定義され議論されていないという点が指摘されたが、これは人文社会科学者のあいだでもさまざまな議論があつて、およそ容易には決着のつかない問題であり、もし佐藤氏が今後この問題について、さらに明快な議論を提示できるなら、博士号授与というレベルをはるかに超えた、真に重要な学術上の貢献となるであろう。博士論文として提出されたものはすでに、学位授与に際して要求される水準を大きく超えたものである。したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。